

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2020

課題番号：19K13376

研究課題名（和文）1920年代在台日本人社会の「台湾人」認識 台湾議会設置請願運動をめぐって

研究課題名（英文）Recognition of "Taiwanese" of Taiwan's Japanese society in the 1920s: over the Taiwan Parliament Petition League Movement

研究代表者

周 俊宇 (JYUN-YU, JHOU)

東京大学・先端科学技術研究センター・特任研究員

研究者番号：70812650

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1920年代に在台日本人論者が台湾社会や政治の変容を論じた著作を素材に、彼らが近代台湾史上初の「台湾人」（漢人を意味し、先住民は含まれない）自身による本格的な政治運動である議会運動を、「台湾人」の民族性に対する認識という文脈からいかに論じたか、そして議会運動がいかなる認識空間に置かれていたかを検討した。

具体的に、こうした議論が1920年代までの在台日本人の「台湾人」認識といかなる関係にあったか、また同時代の民族心理学といかなる関係にあったかについて論じた。さらに、在台日本人社会による「台湾人」認識の特徴を指摘し、こうした認識に対する「台湾人」エリートの受け止め方についてもふれた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本統治下における「台湾人」意識の生成過程について、これまで主体性が重視される台湾史研究において考察がなされてきたが、いわゆる民族性に関して、差別の口実だとして自明視され、その内実や変容は検討されてこなかった。

1920年代は台湾人認識を議会運動と関連させながら論じる文献が多く世に問われ、その中には「台湾人」の民族性に対する考察が多く含まれている。本研究は、これらの言説を検討することにより、1920年代における在台日本人の「台湾人」認識、そして議会運動がどのような認識空間に置かれていたかといった点で新しい知見を貢献した。

研究成果の概要（英文）：This study is based on the works of Japanese theorists in Taiwan discussing the transformation of Taiwanese society and politics in the 1920s. It examined how they discussed the Taiwan Parliament Petition League Movement, the first full-scale political movement by Taiwanese themselves in modern Taiwan history, in the context of Chinese Characteristics, and in what cognitive space the Taiwan Parliament Petition League Movement was placed in.

In particular, this study examined how these discourses had a relationship with the recognition of Taiwanese by the Japanese in Taiwan until the 1920s, and with the ethnic psychology of the same era. In addition, It also pointed out the points of Taiwanese recognition by Japanese society in Taiwan, and touched on how the Taiwanese elites perceive such recognition.

研究分野：近代台湾政治思想史

キーワード：台湾 民族性 中国 台湾議会設置請願運動 他者認識 日本

1. 研究開始当初の背景

1920年代以降の「台湾人」(漢人を意味し、先住民は含まれない)意識の萌芽とその変容について、これまで多くの研究により検討されてきた。しかしながら、その焦点は常に「台湾人」側に置かれ、日本の植民地統治の影響については「国民性」の上からの植え付けや制度・政策による差別などに焦点が置かれるのみで、日本人の他者認識としての「台湾人」認識、とくに「民族性」に関して包括的な研究はなされてこなかった。

近代台湾史上初の「台湾人」自身による本格的な政治運動である台湾議会設置請願運動(1921~1934。以下、議会運動)についても、すでに厚い研究蓄積があるが、「台湾人」の主体性の立場から出発するものが多い。しかし、「台湾人」の植民地統治経験は「日本化」の過程であった同時に、「民族性」なる本質主義的なものが日本人により発見・認識される過程でもあった。

1920年代は「台湾人」認識を台湾社会の変遷と関連させながら論じる文献が多く世に問われ、その中には「台湾人」の民族性や民族心理に対する観察が多く含まれているにもかかわらず、こうした在台日本人社会・論壇の観点はまだ検討の余地が残っている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦前の植民地台湾と日本内地で展開された議会運動について、これまで注目されてこなかった在台日本人社会の認識を、歴史学的実証研究に基づいた手法で考察することにある。具体的に、植民地台湾の社会変化に敏感であり、総督府や「台湾人」(漢人を意味し、先住民は含まれない)に対して在台日本人社会の代弁者ともなり得る「記者」、また「台湾人」を指導するという中間指導者の立場にいながらも、社会民情を常に観察・把握する「警察官」による言説を中心に考察し、そこにいかなる観点・論理が存在するかについて、近代日本の「台湾人」認識という大きな文脈に沿って検討することにある。

3. 研究の方法

本研究は、戦前の植民地台湾と日本内地において、1921年から1934年まで「台湾人」エリートにより展開された代表的な反植民政治運動、すなわち議会運動について、これまで注目されてこなかった在台日本人の言説を考察し、そこから在台日本人社会の「台湾人」認識がどのように反映されているかを検討することを目的とする。

なお、議会運動自体は1934年まで続いたが、帝国議会での請願が成功する見通しがなく、また陣営内部の分裂により、1930年代前後より形骸化したため、この運動と真剣に向き合った言説も実際に1920年代に集中しているため、研究の射程に関しては1920年代の認識とする。

すなわち、在台日本人は、「台湾人」「民族心理」の変化と、政治運動という全く新しい形式の反植民地抗争の行動者である「台湾人」に注がれていた視線とのなかで、これまで語ってきた「支那民族性」を新たな状況にどう適応させたのか、という本論文の問題意識にかかわる問題である。

4. 研究成果

本研究では、日本による植民地統治において、支配民族であった日本人の「台湾人」認識が1920年代以降の「台湾人」意識の萌芽にどう影響していたかという問題意識のもと、主として数多くの「民族性」(ethnic characters)言説から、「台湾人」の置かれていた認識空間を検討した。また、この認識が台湾に対する植民地統治のイデオロギー、そして近代日本の他者認識においてどのような様相を呈していたかについても考察した。本研究は日本統治下の「台湾人」がどのような「民族性」の視線に晒されてきたのかという認識空間、つまり「台湾人」意識が萌芽した環境について、制度・政策の議論ではなく、「民族性」言説という認識の次元から示した。

具体的に、植民地台湾を舞台として、1920年代に主として在台日本人記者や警察官により執筆された台湾社会の変容が論じられた著作を中心に、近代台湾史上初めて「台湾人」自らによる本格的な政治運動である議会運動への視線を「支那民族性」に関連付けて論じた。またこの時期の言説に多くみられる「民族心理」という表現を当時の文脈において考えるとともに、内地の議会運動に対する認識と構造的にどのような違いが見られるかについても考察した。この時期の「民族心理論」において、「台湾人」エリートが求める自治は、単に「支那民族」の「社会」を重視し、「国家」からの干渉を避けたいという「自治」の履き違えとして理解する意見もみうけられた。

こうした認識は、1920年代まで植民地台湾で近代日本の中国認識と共有しつつ蓄積されてきた「支那民族性」という認識枠組を継承する側面もあれば、同時代の西洋に発する民族心理学の受容の側面もあり、そこには、運動者が主張する「民族自決」との対立構図が見受けられることも確認した。また、在台日本人の認識は「台湾人」エリートにとって風馬牛だったのではなく、「台湾人」エリート側の政治主張や「台湾人」意識の萌芽と一定の相互作用を構成した側面もあ

ったことをも検討した。本研究により、1920年代における「台湾人」認識の語りの一側面を明らかにしたとともに、議会運動研究そのものへも新しい知見を寄与した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 周俊宇	4. 巻 23
2. 論文標題 日本統治初期台湾における公学校日本人教員の台湾人認識－『台湾教育会雑誌』における修身教育論を手がかりとして－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 植民地教育史研究年報	6. 最初と最後の頁 76-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 周俊宇	4. 巻 70:3
2. 論文標題 日本統治下対於台湾「土匪」的民族性認識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臺灣風物	6. 最初と最後の頁 21-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 周俊宇	4. 巻 21:2
2. 論文標題 「移住支那人」の再認識：日本の台湾領有初期における地誌的文献に見る台湾漢人	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 マテシス・ウニヴェルサリス	6. 最初と最後の頁 169-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 周俊宇
2. 発表標題 1920年代における「台湾議会設置請願運動」の民族心理論
3. 学会等名 日本台湾学会第22回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 周俊宇
2. 発表標題 日治時期台灣的「支那民族性論」與台灣議會設置請願運動
3. 学会等名 台灣・東吳大學・第十三屆史學與文學學術研討會：從歷史、檔案到數位人文
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------